

本日は、私達卒業生の旅立ちの日にあたり、このような祝賀会を催して頂き誠に有り難うございます。ご多忙の中、副理事長をはじめ、学長、教職員の皆様、ご来賓の方々のご臨席を賜り、卒業生一同心よりお礼申し上げます。

卒業という節目を迎える今、私達卒業生は、入学した時と比べて遥かにたくましく、また人間的にも大きくなったことを各々が実感しています。私達の胸には、ここまで自らが置かれていた境遇、待ち受ける未来への想いが過ぎります。

私事ではありますが、私は伏見稲荷大社の本山にある神社の跡取り娘であり、本来であれば自分の夢に猛進できる立場ではありませんでした。夢を抱き、もう一度学びたいと悶々と過ごす私に気づき、背中を押してくれたのは母でした。そんな中始まった私の大学生活は、不安と期待に胸を膨らませた周囲の新生生とは若干異なり、入学式の日から猪突猛進の思いでした。「私は人並みであってはならない」常に自分にそう言い聞かせ、日々勉学に真剣に取り組んできました。熱心に勉学に取り組むあまり、注意力が散漫し通学中に事故に遭い、病院にも行かず登校したことも二度あります。自分のために、そして周囲の反対を押し切って応援してくれた母のために、私は常に全力でした。二年次も終わりに近付いた冬、母が体調を崩し病院に付き添い、医師から告げられた言葉は「余命半年」でした。三年次の春を休学し、母との時間を大事に大事に過ごしました。母の最期を看取った夏、大きな支えを失い復学する意味を考えていた頃、私を救ってくれたのはゼミの仲間と先生です。それまで一匹狼だと思っていた私は、多くの温かい支えがあったことに気づき、立ち上がってまた歩みを進めることができました。勉学への意気込みは更に増し、ボランティア活動や資格取得などにも力を注ぎ、そして学内のあらゆるイベントにスタッフとして積極的に参加させて頂きました。仲間や先生方はもちろん、職員の皆様の笑顔のひとつひとつが、私の大きな支えであり、京都外国語大学の全てが私の人生の大きな宝となりました。

この京都外国語大学という恵まれた環境の中で切磋琢磨してきた私達卒業生は、ここで学んだことを誇りに思い、ここで受けた恵みを、自分たちの人生だけにではなく、より広く社会へ還元していけるよう、今後各々の進む専門分野において日々邁進して参ります。また、京都外国語大学の”PAX MUNDI PER LINGUAS”「言語を通して世界の平和を」という建学の精神を胸に、世界平和達成へ貢献して参りたいと思います。

最後に、未熟な私達をご指導下さいました先生方、大学生活を支えてくださった職員の皆様、あらゆる場面で惜しみない支援をしてくれた家族と友人に改めてお礼申し上げますとともに、京都外国語大学の輝かしい発展を祈念いたしまして、謝辞とさせていただきます。有り難うございました。

令和元年9月19日 修了生・卒業生 代表 英米語学科 原澤里奈